

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 徐 文臻

論 文 題 目

Re-evaluation and expansion of the cognitive
model of loneliness in the digital context:
A cross-cultural comparison

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 中谷素之

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 河野荘子

論文審査の結果の要旨

本論文は、ソーシャルメディア（SNS）を利用することによって、孤独感が軽減されるのか、という素朴な疑問から始まり、孤独感の認知的食違いモデル（Peplau & Perlman, 1979）をもとにオリジナルな SNS の利用と満足モデルを提起し、それを検証している。本研究の目的は次の2つであった：1）西洋考案のモデルに対抗し、東アジア文化を起点とする SNS 利用と孤独感を結ぶモデルの構築；2）利用と満足の期待と現実のギャップによる失望感・充実感が孤独感に及ぼす影響についての検討であった。

第1章は、SNS 利用と孤独感に関するこれまでの研究を概観し、このテーマでの研究の問題点をまとめた上で本研究の目的を明確にした。特に、研究間の結果の一貫性が欠けていることや、非理論的で単発的な研究が多いことなどを指摘し、体系的な実証的研究が望まれることを訴求した。その上で、孤独感の認知的食違いモデルの適用を提案し、それを SNS 利用のコンテキストにおいて検証することを本研究の目的とした。また、これまでの研究は西洋を中心に進められており、日本人や中国人などの利用行動、利用目的や利用動機に見合っていない見解のもとで行われてきたことを批評し、東アジアの SNS ユーザーを対象とした研究の必要性をアピールした。

第2章では、研究目的を果たすために必要な測定尺度の開発についての一連の研究の結果をまとめ、日本人と中国人を対象とした SNS 利用と満足を測定するための尺度の妥当性と信頼性の検証について報告した。日本人・中国人 SNS ユーザーの利用と満足の自由記述研究から始め、SMUGS 尺度（Social Media Uses and Gratifications Scale）を構成し、関連する既存の尺度との併存的妥当性が十分だることと、探索的・確認的因子分析による SMUGS の構造を明らかにし、その内的整合性を確かめている。

第3章では、上述のアジアを対象とした研究の欠如を踏まえ、研究2を中心に、孤独感の認知的食違いモデルを、主要なオンラインコミュニケーション・プラットフォームの利用者を対象に、日本および中国で検証し、認知的食違いモデルの交差妥当性を検証した。2種類の認知的食違い（理想－現実の食違い，一般－現実の食違い）が SNS 対人関係満足度と孤独感に与える影響を明らかにするために、日本人と中国人を対象とした調査を行った。その結果、いずれの文化でも認知的食違いのフレームワークを部分的に支持する結果が確認された。

論文審査の結果の要旨

第4章では総合考察を行った。本研究では SNS を利用する際、オンライン交流に対する期待と達成度の食違いが孤独感に与える影響のメカニズムを比較文化の観点で検討した。本研究の最も大きな特徴は、次の2点について明らかにしたことである。第一に、孤独感の認知的食違いモデルは対面的コミュニケーションの文脈だけでなく、SNS を介したコミュニケーション文脈にも適用できること。第二に、孤独感に影響する要因は、西洋と東洋の文化差だけでなく、集団主義と一括りにされがちな東アジアの文化内において異なる点を実証したこと。

以上、本研究は SNS 利用がユーザーの孤独感にどのような効果をもたらすのかを、孤独感を説明する理論的モデルを構築し、日中でのモデルの適合性を検討した。この研究の学術的貢献は、以下の点にある。

第一に、これまでの SNS 利用研究は西洋のユーザーを前提に行われており、そのため、SNS 利用は自己顕示欲求の充足させるためであると想定されていた。しかし、本研究では、日本人や中国人のような集団主義文化の人びとを想定し、自己アピールよりも、人と人のつながりに利用されていることに着目し、孤独感との関連を追究している。

第二に、本研究は上述のように、これまで対象とされていなかった東洋人に対応した SNS 利用と満足の尺度 SMUGS を開発し、SNS の利用の裏にある動機の東西の違いを考慮したことが大いに評価できる。

第三に、同じ東洋人および集団主義者でも、日本人と中国人の SNS 利用とその孤独感への影響の違いを明らかにしており、類似していると思われる文化の差についても検討しており、個人主義文化は一様ではないことを明確にしている。

第四に、対面的 (Face-to-face) な人間関係を想定した孤独感モデルが、SNS の人間関係にも適用できることを示し、オンラインの人間関係でも対面と同等に、人の心理的ウェルビーイングに寄与することを間接的に裏付けている。

これらの学術的貢献がある一方で、本論文に対して審査委員からは主に以下の疑問が呈された。

- 1) 本研究で用いられた認知的食違いモデルに対して、自己不一致理論も本題に強く関連するアルタナティブな説明枠組みになったのではないかとの指摘があった。
- 2) ソーシャルメディアの利用と満足の概念が十分に説明されておらず、それは動機づけのレベルを問題にしているのか、それとも行動レベルなのかが明確ではない。

論文審査の結果の要旨

- 3) 食い違いそのものではなく、どのようなタイプの食い違いなのかまで考えて仮説にする必要がある。
- 4) 文化を取り扱っている研究であるので、より多くの議論を期待する。
- 5) なぜ‘規範—現実の差異’ではなく“理想—現実”の差異で、集団主義の違いが影響してくるのかが、わかりづらい。
- 6) SMUGS 尺度の開発に至るまでの予備調査の手順と結果について、より多くの記述が望まれる。
- 7) サンプルングが大学生であるが、社会人のサンプルの必要性とその意義についての説明が望まれる
- 8) SMUGS 尺度が他の既存尺度との違いと特異性についてより多くの記述が必要。

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。